

平城宮第一次大極殿院の調査（平城第454次）

大極殿院は、天皇の即位や元日の朝賀^{ちやうが}、外国使節の謁見^{えっけん}などをおこなった場所で、古代都城の中で最も重要な空間です。平城宮の大極殿院は、奈良時代はじめに平城宮の中央北側に造られ、奈良時代後半になると、東の区画に移ります。この2つの大極殿院をそれぞれ第一次大極殿院、第二次大極殿院と呼んでいます。

奈良文化財研究所では、第一次大極殿院の発掘調査を1959年の第2次調査から継続しておこなってきました。これまで、区画の東半分と回廊部分の発掘調査を終え、遺構の全貌がほぼ解明されています。まず、区画の周囲は築地回廊で囲まれ、回廊の内部は北側3分の1が高くなっており、壇上に大極殿と後殿が南北に並びます。壇の南側は一面に礫が敷かれ、広場となっていました。区画全体の大きさは南北318m、東西178mにも及びます。

今回の調査は、第一次大極殿院東半分のうち未発掘だった区画南東隅部分で、東面回廊と南面回廊に囲まれた区画内部の広場にあたります。調査面積は1556㎡で、4月13日より開始し、7月15日に終了しました。

調査では、当初の予想通りに広場の礫敷が確認されました。この礫敷は全部で3層あり、それぞれ①平城宮造営当初、②南面回廊に楼閣を増築する時期、③恭仁京から還都後に敷かれたもので、古いものか

ら下層礫敷、中層礫敷、上層礫敷とします。これら3層の礫敷はそれぞれ礫の大きさが異なり、もっとも古い下層礫敷では径5cm程度、中層礫敷は径5～15cm、上層礫敷は径1～3cmでした。

さらにこの礫敷を掘り込む幅2m程の東西溝が検出されました。この溝は2時期あり、古い方は中層礫敷に、新しい方は上層礫敷にともなうもので、西から東に流れ、東面回廊の雨落溝に合流します。そして回廊の隅部分の基壇の下の暗渠を通して区画の外側に流されます。

この東西溝と礫敷の標高を比べると、興味深いことが分かりました。平城宮造営当初の下層礫敷の段階では、地面は北から南まで緩やかに傾斜しています。ところが中層礫敷を敷く段階で、南面回廊より約25mの範囲で下層礫敷の上に盛土をし、地面の傾斜を北側が低くなるように変えていました。この低くなった谷の部分に先ほどの東西溝を通していったのです。つまり、平城宮造営段階では雨水などの排水は、北から南面回廊北側の雨落溝まで流していたものを、南面回廊に楼閣を増築した時には、楼閣の北側に東西溝を通し、その溝に排水していたと考えられるのです。

その理由は2つ考えられます。ひとつは、南面回廊に楼閣を増築したことで、南面回廊の北雨落溝が機能しなくなったため。もうひとつは、広大な大極殿院の排水の処理を改善するためと考えられます。

去る6月20日には現地説明会をおこない、755名もの方々にお越しいただきました。現在復原工事中の大極殿正殿も覆屋の撤去が始まり、その姿が徐々に見えて来ました。今後は、いよいよ来年の平城遷都1300年祭に向けての整備が始まります。

（都城発掘調査部 大林 潤）



第454次調査区全景（南東から）



東西溝（西から）